

新たな人生を切り拓いた4人のアスリートたち

ベトナム・パラスポーツ!

「2003年のアセアンパラゲームズ*を機に、ベトナムの障がい者に対する認識は大きく変わった。スポーツには、人間の意識を変える絶大な力がある」と、ハノイ障がい者スポーツセンター長。スポーツが彼らに与えたかけがえのないものは? 4人の所属選手に密着した。

*ASEAN Para Games. ベトナムは2003年の開催国



ハノイ障がい者スポーツセンター

1988年設立。現在、200人以上の選手が所属する。陸上や水泳など全7種目を実施しており、年1回開催のベトナム大会をはじめとする国内外の大会に積極的に参加。選手がもつ障がいは、視覚障がい、知的障がい、脳疾患や四肢切断などによる肢体不自由など多岐に渡る。

劣等感に苛まれる日々

列車事故により、両足切断という突然の悲劇が襲った。当時14歳だったトゥックさんは学校を退学、自宅に引きこもる日々が続く。「存在が恥ずかしくてたまらない。生まれつきでも、小さい頃に負った障がいでないことが、余計に自分を苦しめた」。

臆病だった自分が変わっていく

子ども時代の夢は、「スポーツ選手になること」。事故から13年が過ぎ、家族の励ましを胸に陸上選手としての第1歩を踏み出すことに。「自信を持って生きること、自分にも誰かを支えられるということ。同じ境遇にある仲間との出会いは、新たな考えをもたらしてくれた」。本人はおろか周囲も乗り越えられないと感じていた壁を、両腕でよじ登ってみせたのだ。

狙うはミャンマー大会優勝

汗をにじませ鋭い表情で練習に打ち込む中、特に力を入れるのは試合の流れを左右するスタートダッシュだという。目指すは、2014年のミャンマー大会優勝。「両足があったとしたら? それでも今と同じ道を歩んだらうな」。少しだけ間を置き、笑顔でそう答えた。



スポーツを始めて1番嬉しかったことは、「素敵な嫁さんに出会えたこと」。夫婦ともにセンターの所属選手だ

拭い切れなかった心の弱さ

お調子者の愛されキャラで、大学時代も多く友人に恵まれていたチャンさん。しかし、積極的に交流の場を広げてボランティア活動に励む友人たちを横目に、交通事故で失った左足が頭をよぎる。「きっと自分には何もできない」と恐れ、悶々とした日々が続いていた。

障がいを受け止め、前へ

消極的な考えを捨てるため、在学中にセンターに所属。競技用義足を装着しての走行は、バランス感覚が難しく、肌との接触部分が激しく痛むこともある。しかし、大会で好成績を取めるにつれ自身の心境にも変化が訪れる。「自信が持てて初めて、「障がい者」である自分を受け止められた」。こうして徐々に、ベトナムを代表する陸上選手としての頭角を現している。

ベトナムの頂点に立ち続けたい

現在ベトナム陸上の頂点に立つ彼の夢もまた、ミャンマー大会での優勝。義足を上手く操るために大臀筋を、早く真っ直ぐ走るために腹筋のトレーニングを重視する。「ライバルは常に、もう1人の自分。自分がどこまで飛躍できるか、この目でしっかり見てみたい」。



チャンさんの義足はアメリカ製。ソケット部分は、断端形状に合わせてベトナム人義肢装具士が製作した

“障がいを恥じるのはやめた。ライバルは常に、もう1人の自分”

“あの事故がなかったとしても、アスリートを目指したと思う”

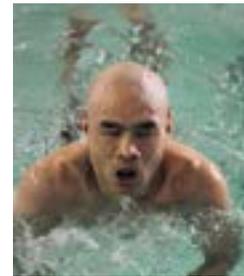
ファム・ホン・トゥック
Phạm Hồng Thức
陸上選手
1975年生まれ。14歳の頃、列車事故により両足を切断。商店を営んでいた2002年、選手の募集広告を目にして陸上を始める。400m走のベスト記録は52秒。車椅子チームの頼れる大黒柱

グエン・カック・チャン
Nguyễn Khắc Trần
陸上選手
1982年生まれ。9歳の頃、交通事故によって左足を切断。2002年に陸上を開始。100m16.50秒をマークするなどベトナム陸上界のエースに成長

“小さい頃、初めて感じた波の音や水の感触が原点”

海水浴が大好きだった幼少期

「初めて触れた波の音や磯の香り。何度も波に打たれて、海水をいっぱい飲んでしまっただけ」と、幼少期を振り返るトゥアンさん。40歳の頃、盲協会の紹介を受けセンターに入所。家族で毎年訪れた海水浴の思い出を手繰り寄せ、参加競技は迷わず水泳を選択した。



陸も水中も自分の居場所

流血するほど激しく壁に頭をぶつけるなど、見えない恐怖はもちろんある。けれど、ビート板を使った真っ直ぐ泳ぐ練習や、水を何回掻けばどれくらい進むかを研究するなど、水中での感覚を徹底的にからだに叩き込んだ。「1番の喜びは、試合先で交流が増えたこと。陸の生活も以前より充実しているよ」。



確実に理解できるようからだに触れてフォームを指導する

コーチとの二人三脚

「彼らは想像力が驚くほど豊かで、考えも深い。教える面白さに夢中です」とトウイ(Thuy)コーチ。トゥアンさんも、コーチの話し方や熱心な指導から、熱意が伝わるという。盲目の選手にとって、コーチとの信頼関係は一層重要。今後も、一心同体で練習に励んでいく。

“全神経を集中させ、直径40ミリのボールを一気にスマッシュ”

高い集中力が物を言う

小さなボールの動きを瞬時に読み、的確に打ち返すという高度な技術が必要とする卓球。生まれつき左腕がないヴィンさんにとって、身体を



独自のサーブで試合をリード

試合の鍵を握るのはサーブ。相手にボールの動きを読まれないよう、卓球台ギリギリまで右手を落とし、垂直にボールを投げて一気にバウンドさせるのが彼のスタイルだ。「左腕がなくとも悲観的になる必要はないし、何でもできる。卓球を始めてからは、一層前向きになれたんだ」。

チャン・クワン・ヴィン
Trần Quang Vinh
卓球選手

1975年生まれ。生まれつき左腕がない。大学の英語科を卒業後、英語やベトナム語の講師を務める。2007年から卓球を開始



ミャンマー大会は、2014年1月開幕!

ベトナムの障がい者スポーツ大会は、1988年にスタート。現在は年に1回、国内大会が開催され、ベトナム全土から選手たちが集結する。現在、センターの所属選手たちが目指すのは、2014年1月に開催予定の「第7回アセアンパラゲームズ」。決戦の舞台は、ミャンマーの首都・ネピドー(Naypyidaw)だ。

Editor's eye

初めてパラスポーツを知り、選手たちの精神力の高さに心から感動した。人間に何かを与えすぎることも、反対に全てを奪い取ってしまうこともないのかもしれない。今後、障がいを持つ人々が才能を発揮できる機会が増えてほしい。